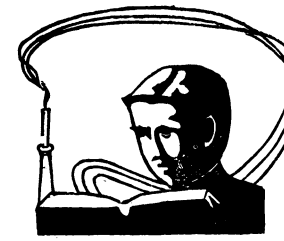

御山の曉

渡邊智榮

「偉人棲居の身延の曉」なんと云ふ神秘な清洌な言なんだらう。峯に眞如の月澄み渡り木梢に一乘の果を結び流るゝ小川の水までも妙法五字の囁きとたゝへられる御山の夜は空高く煌めきし星かげも稀になり行きて靜に流れる梵鐘の餘韵と共に有し日を物語る血と涙とに苦むした身延のすべてはおぼつかなき吐息の樣なる靄氣に打薫じて風もなく音もなく靜かにほのめき行く。

今も昔もことならさる有難き御山に有し日の面影やうつると停回願望に心緒みだされ、せめても偉人棲居の跡を拜せんと、ほのめき流るゝ大鐘の餘韵を耳奥にのこしつゝ靜に起きる誦經の不斷な梵音に引かされ芳薫漂ふ大堂の御前に彳む時清く流るゝ法の朝風に頰を打たれ秘める棲神の面影そゞろに浮ぶ時思はず合掌の一刹那に感得する所詮口では言ひつくせぬエクスタシイの境地に充たされぬ。

すでにして日は東山より出でぬ、其の金色の光は始め柔かに次第に強く身延川の朝がすみを貫ぬきて矗々亭々と聳え立つ杉並木の上を通つて宏壯雄大なる大莊嚴の内に流れるにぶき鉛白色の七面山は見る〳〵透き通り麓の谷はまだ朝がすみにねむる!! 其の清麗!! げに身延ならではと覺えぬ。あゝ詩にもがな、繪にもがな。